

「私たちの安中旅行―良心碑を巡る旅―」

同志社大学の歴史と文化財を巡る「キャンパスツアー」は、今年4月に11年目を迎えた。ガイドを務めた学生たちは、ガイドを通じて学ぶ中で自らの内に母校への愛情を育ててきました。その集大成として4年次生を中心に、新島襄ゆかりの地・群馬県安中市を訪ねる卒業記念ツアーを企画・実行しました。

卒業記念ツアーの参加者は、角谷卓哉さん（大学司法研究科）、中村拓真さん（大学理工学研究科）の大学院生、小野華奈子さん、稲垣宏行さん、遠藤美佳さん（Ⅱ以上、大学文学部）、橋本暁寛さん、小林景子さん（Ⅱ以上、大学社会学部）、上田悠未さん、宮井章仁さん（Ⅱ以上、大学経済学部）、田附拓也さん（大学商学部）、今里舞さん（大学理工学部）、平岩佐知子さん（大学文化情報学部）の4年生および、卒業生の星翔太さん（08年工学部卒）、大学広報課スタッフの稲田由香

の計14人です。

ツアーが企画されたのは昨年5月ごろ。ガイド仲間と卒業旅行の話を持ち上がり、同志社の歴史を語ってきた者同士として「一度は押さえておきたかった」安中への旅が決まりました。群馬県へ行くのであれば、高崎市にある良心碑も見たい、それなら日本にあるすべての良心碑を見ておこうと、日本にある七つの良心碑すべてを巡るサブテーマも決定。往路はJRの「青春18きっぷ」を利用する、いかにも若者らしい旅が始まりました。

京都で良心碑に旅立ちの挨拶

■3月3日（火）

安中旅行に先立ち、平岩さん、田附さん、橋本さん、中村さんの4人が、学研都市校地、京田辺校地、香里中学校・高等学校、小学校、今出川校地にある計五つの良心碑を訪問しました。

「青春18きっぷ」で静岡へ
アクシデントを乗り越えて
晩晴草堂に到着

■3月4日（水）

朝からJR京都駅に10人が集合し、9時31分発の快速米原行きに乗車。米原駅、大垣駅で乗り継ぎ、豊橋駅で稲垣さん、宮井さんの2人が合流して、13時20分、浜松駅に到着。駅近くの鰻屋で昼食を楽しんだ後、再びJRを利用して15時21分、静岡駅着。12人がレンタカー2台に分乗して晩晴草堂をめざします。車にはいつしか「快風丸」と「ベルリン号」の名が付けられ、ベルリン号の車内ではCDのカレッジソングがエンドレスで流され続けていました。

ました。

新島終焉の地と生誕の地へ

■3月5日（木）

凍結したレンタカーに湯をかけて解凍作業に励み、雪で「襄だるま（写真）」を作った後、9時40分に晩晴草堂を出発。晩晴草堂で教わった山中湖そばの富士山絶景スポットに立ち寄り、前日の追突事故から続いていた緊張をほぐした後、一路、JR三島駅へ。レンタカーを返却後、三島駅から東海道本線熱海行きに乗車し、熱海駅で東京行きに乗り換えて大磯駅に到着。徒歩約7分で「新島終焉の地」に着き、全員で創立者を偲びました。「朝の冷え込みが嘘のように、大磯は暖かい土地でした。新島が療養に選んだことが納得できました」（平岩さん）

大磯駅から再び電車に乗り、16時3分、神田駅着。駅から30分近く歩き、学士会館そばにある「新島襄先生生誕の地」の碑を見学します。その後タクシーに分乗してJR上野駅へ向かい、高崎駅へ。駅前のビジネスホテル



3月5日、出発前の記念撮影。左上は、「襄だるま」

ところが2台の間で軽微な追突事故を起こしてしまい、後ろにいた快風丸のナンバプレートが折れ、ベルリン号の後部がへこむ被害が発生。警察の実況見分のため現場で約2時間を過ごした後、追突した快風丸のドライバーは交代し、安全のためにそれぞれのペースで走行することにしました。途中、富士山を望む日帰り温泉に立ち寄り、カーナビの不具合などで道に迷いながらも慣れない雪道を走り続け、22時ごろ、先にベルリン号が、やや遅れて快風丸が無事「晩晴草堂」に到着。徳富蘇峰の別荘に感激し、宿泊者が綴るノートに同志社人の熱い思いを見つけた後、この日の反省を行ってから就寝し



新島襄終焉の地にて

に宿泊しました。

安中教会と新島旧宅を見学し新島学園で六つめの良心碑を訪問

■3月6日(金)

朝食後、再びレンタカー12台を借り、うち1台は「ワイルド・ローヴァー号」と命名されました。ここでガイドの先輩である星さんが合流。土砂降りの中を安中へ向けて出発します。

9時55分、約30分かけて日本キリスト教団安中教会に到着しました。ここでメンバーの小林さんおよび、新島学園中学校・高等学校の小林郁夫事務局長と合流し、教会で五味一牧師からお話を聴きました。「新島が生きていた時代に世界では何が起こっていたかと

いうお話を聴いて、新島の取った行動がさらに理解できるようになった」(遠藤さん)。「ボストン港に着いてから上陸の許可が下りるまで船上で祈り続けた新島の胸中、その後神学校入学まで努力を重ねるうちに形成されたであろう新島の人格についてのお話が感慨深かった」(中村さん)など、キャンパスツアーガイドで得た新島像が、より深められるひとときとなりました。出発前の『マンガで読む新島襄自由への旅立ち』(同志社大学発行)での予習も、新島の安中時代の理解に役立ったということです。

乗り越えた時にこそ、人は強くされる。新島がボストン上陸までに不安の中で折り続けた経験があつたからこそ、現在の同志社がある。「辛いことがあつてもマイナスに考えるのではなく、前を向いていく生き方が印象的」(平岩さん)。「自分の生き方を考えさせられる機会になった」(遠藤さん)というように、五味牧師のメッセージは、これから未来を生きていく若い同志社人の心に深く響きました。

教会を後にして、次は1832(天保3)年創業の醤油屋「有田屋」へ。

中山道沿いで商いを続けてきた有田屋の湯浅家は、同志社第10・12代総長を務めた湯浅八郎ら、同志社とゆかりの深い人物たちを輩出した一族です。小林事務局長と湯浅家当主の案内で、醤油の天然醸造を行っている土蔵を見学した後、有田屋向かいにある日本初の私設図書館「便覧舎跡」を見学しました。12時過ぎには「新島襄旧宅」に到着し、隣接する展示室や旧宅内部を訪れました。

12時30分、「新島学園中学校・高等学校」に到着。市川平治校長をはじめ教員の方々から大歓迎を受けて、一同は大感激。まもなく同志社大学に入学予定の生徒たちと共に昼食をいただき、京田辺校地の様子を教えるなどガイドの本領を発揮。チャペルではパイプオルガンによる校歌と讃美歌の演奏を鑑賞して、新島学園の方々と交流を深めました。ここで六つ目の良心碑を訪問した後、新島学園の教員の案内で国指定文化財「富岡製糸場」を訪ね、

ボランティアガイドから熱心な説明を受けました。

16時40分、「新島学園短期大学」を訪問。ここでも大歓迎を受け、大平良治学長と山下智子チャプレンのお話を聴いた後、学内を案内していただきました。

この日の宿泊は「かんぼの宿 磯部」。温泉で疲れを癒した後は大広間で懇親会を行い、部屋に戻って「同志社ワイン」赤・白、梅酒「七五三太」、日本酒「七五三太」で二次会を行いました。

最後の良心碑を探しに高崎自然歩道へ

■3月7日(土)

JR高崎駅でレンタカーを返却後、ツアーは解散。高崎の良心碑見学組、ICU訪問組、帰宅組に分かれて駅を後にしました。良心碑組は高崎駅から約1時間歩き、高崎自然歩道沿いに立つ良心碑へ。伊香保温泉に立ち寄った後、帰途につきました。

今回、同志社を外から見たメンバーは、それぞれに新島と同志社への思い

を深めました。「新島襄が安中でかなりの有名人であることを知り、改めて偉大な人だと思った」(橋本さん)。「新島学園の方々と交流させていたいただき、同志社で学生時代を過ごした自分たちと同じ成長を感じた。私たちは大きな家族なのだと思う」(小野さん)。「新島襄と同志社を通じた、つながりの広さが心に残った」(遠藤さん)。「群馬は同志社の第二の故郷」(角谷さん)。「新島の教育の原点を安中に見た」(中村さん)。「新島襄という一人の人物を追うことで、人とのつながりを実感した旅だった。さまざまな刺激を受けた大学生活だった」(平岩さん)

今回の旅行で得たものが現役のガイドに伝わり、キャンパスツアーの発展に寄与できればという願いを抱いたメンバーの皆さん。「10年後にツアーを再結成して、米国アンドーヴァーのフイリップス・アカデミーにある八つ目の良心碑を訪ねてみたい」(橋本さん)という、新たな夢も生まれた青春旅行でした。(08年3月26日、卒業旅行参加者に取材し掲載。)

シンポジウム 「説教を語る者の喜び」

大学神学部教授 関谷直人

3月11日（水）午後1時より、大学神学館3階礼拝堂において、加藤常昭師、深田未来生大学名誉教授による講演ならびにシンポジウムが開催された。司会・進行は大学神学部の関谷直人が担当。

最初に講演された加藤師は、東京大



学文学部哲学科、東京神学大学大学院修士課程を修了され、1986年まで東京神学大学教授（実践神学）を務められる傍ら、ハイデルベルク大学客員教授、国際説教学会会長などを歴任された研究者であり、同時に長く、日本基督教団鎌倉雪ノ下教会の牧師として働かれた経験を持つ。そうした現場と学識にしっかりと根ざした視点から、現代における説教のあり方、とりわけ「いかにして喜びをもつて説教者が語りうるか」について語ってくださった。

語ること」の中に含まれる「Art」的要素に注目し、それを単なる色物的「芸」にとどめるのではなく、「Performance」の領域にまで高めることで、説教の可能性が広がるのではないかと論じた。短い休憩を挟んだ講演会後は、フロアの参加者から寄せられたコメントに、加藤、深田両師が適宜答える形のシンポジウムが行われた。一つの質問に両師がそれぞれの立場からかなり対照的なコメントを行う場面もしばしばで、説教の捉え方が非常に多様であることが感じられた。とりわけ説教を一つの「Performance」としてとらえる深田師の考え方に、加藤師が挑戦をする場面では、司会者も巻き込まれた形で大いに熱の入った議論となった。今後の説教のありようを考える上で、非常に意義深い集会となった。

同志社大学 「政策学会講演会」

大学政策学部教授 今川 晃

テーマ

「地域主権型道州制で日本再生」

講師 江口 克彦 氏

(株式会社PHP総合研究所 代表取締役社長、株式会社PHP研究所 代表取締役社長)



わが国では平成の市町村合併が一応収束しつつあり、次のテーマである道州制議論へと移ろうとしている。しかしながら、道州制については賛否を含め、多様な議論が展開されているところである。これまでの歴史の中でも道州制議論は何度も浮き沈みしてきたが、具体的な制度化へと結実することは無かった。今回もその行方は不透明であるものの、この国の構造を変えようとしている議論に学生も関心を抱き、主体的に参加するには、一定の素養が求められる。そこで、地域主権型道州制を提唱するPHP総合研究所代表取締役社長江口克彦氏を講師にお招きしたのである。

江口氏は、東京の一極集中、中央

集権体制、官僚制の弊害等を是正し、国内の各地域がその特性に応じて発展するため、「地域に密着し、地域が主体となり、地域住民が納得満足し、またムダのない行政が行なわれる国のかたち」を実現する地域主権型道州制を提唱する。国・道州・基礎自治体の役割明確化、道州共同財源による道州間財政調整システムの構築等、具体的な制度設計についても説明した。

聴講した学生約250人のアンケート結果を見ると、学生は道州制の意義、あるいは逆に疑問点を明確にし、これからの学習意欲を高めたものと判断できる。

(2009年7月1日 大学新町キヤンパス尋真館30番教室にて)

同志社女子大学 「新人生歓迎会」

4月22日(水)、本学にとって初めてとなる行事『新人生歓迎会』を両キャンパスにおいて開催した。この行事は入学間もない新入生を、自分たちの所属する学部・学科ではなく、出身地別にテーブルに分けたのが大きな特徴。本学は全国から学生が集まっており、寮・下宿生が約4割を占めている。「県人会」的な交流のなかで、各出身地共通の話題や言葉を通してお互いが安心感をもち、リベラル・アーツの大



た。

当日は学長および同志社女子大学同窓会《Vineの会》会長による歓迎の挨拶があり、引き続き、チアリー

学にふさわしく、学部・学科の枠を越えた幅広い人間関係を構築するきっかけづくりにもしたいと考え実施した。新人生歓迎会は他の大学でも行なわれているが、出身地域ごとにグループを分けたのは全国的にも珍しい試みであるといえる。新入生他、各地方出身の教職員、在学生にも参加を呼びかけるとともに同志社女子大学同窓会《Vineの会》の協賛・協力を得て、全国各地から卒業生にも参加をいただいた。

ーダー部、吹奏楽部が歓迎のパフォーマンスを披露した。また、本学教員より歌詞の意味や発音方法を説明しながらのDoshisha College songの歌唱指導も行なわれた。その後の懇親の部では各テーブルごとにお菓子や飲み物を囲みながら、和気あいあいとした雰囲気の中、親睦が深められた。それぞれのテーブルでさまざまな方言が飛び交い、新入生同士で連絡先を交換し合うなど、新たな人間関係が築かれる良い機会となったようである。終了後参加者からは、「同郷の友人ができて安心した」「先生がより身近に感じられるようになった」「素敵な卒業生に会えてよかった」などの感想が寄せられた。本学にとって初めての試みで、準備段階から手探りの状態であったが、最終的には京田辺キャンパス約400人、今出川キャンパス約300人と多くの新入生が参加し、盛況のうちに終了した。

日時…2009年4月22日(水) 15:00～17:00
場所…京田辺キャンパス 恵真館アリーナ
今出川キャンパス 純正館デントンホール